

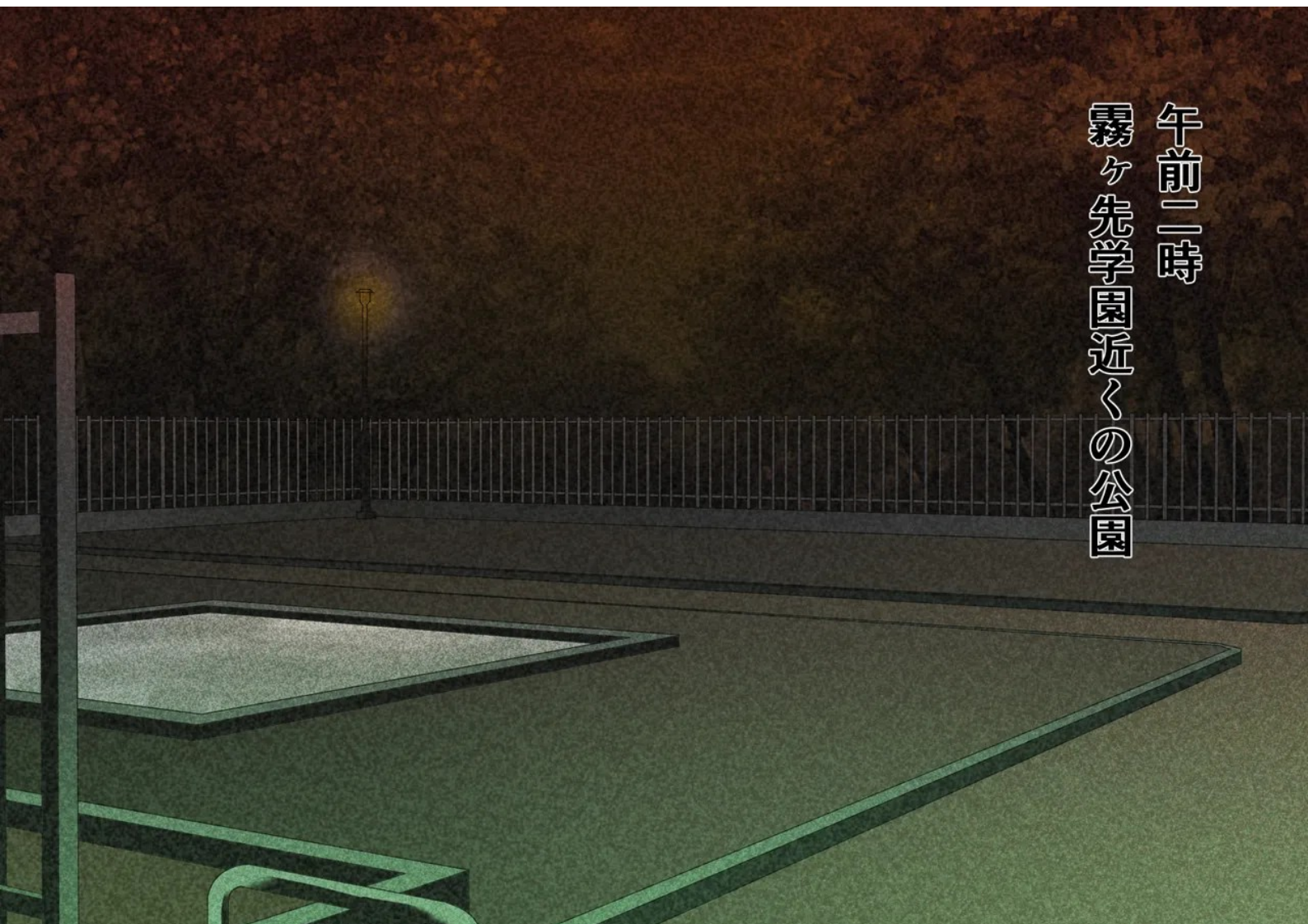


怪物人ピエロ女

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

午前二時

霧ヶ先学園近くの公園



公園の中にヒツソリと佇む

老朽化した公衆便所。

アンモニア臭と、なぜかゴムの臭いが
入交り、酷い臭いを催していた。

ギユ、ギチュユ……

「ぐオ……おおおっ！」

女子トイレ、一番奥の個室から

禍々しい気配と共に

ゴムの擦れる音と、

女のくぐもった声が漏れる。



ギュー、グチュ、ギチュ……

全身ラバー体の異形の女が、

液状のゴムで拘束された女を

自身の股間に生えたチンポを使って

凌辱していた。

「んモッ、ンヒッ！」

顔面をラバーで覆われながらも、

チンポで打ち付けられる度に喘ぎ声が漏れる。

「久しぶりの獲物、じっくり
楽しまないと……フフフ」





「ハアハア♡……さ、さあ

一発目、注ぎ込んであげるわ……

私のくっさいゴムザーメン♡」

「んー！」

「ンフフ、いいわ！」

もっとその悲鳴を聞かせて！

私を昂らせてっ♡」

「グッ、イクッ♡」

ぷるぷるぷるぷるー！

「んーッ！んーッ！？」



ドサツ……

「ンフウー♡ザーメンが溢れ出すくらい
イイわねお前のマンコ。さあまだまだ……」

「……誰？」

異形の女が先ほどまで犯していた女を
起こして事を再開しようとした矢先、
背後から気配を察し、問いかけた。



「誰?.....ってヒドイなあ♪」
軽い口調で、ヌツと首だけの男が
現れる。

「.....どうやら同じ怪人みたいね」
「ありやりや? 暫く見ない内に
ゴム女イメチェンしたのかい?」

——一年前、霧ヶ先学園のトイレで
起こった生徒失踪事件。

その被害者である黒乃^{くろのあまね}雨音は、
噂を糧とする怪人『ゴム女』の
魔のチカラを受け継ぎ、
新たな怪人『ラバーレディ』として
生まれ変わった。



少々拘子定規だが、優しかった
心は醜く歪み、
利己的で冷酷な性格へと変貌した。



「ふうん、そういう事だったんだ
まあ、^{魔の佳}同じモノ同士、持ちつ持たれつ
って事でこの怪人『ピエロ男』と
仲良くしてやってよ雨音ちゃん」



「ラン、その名前は捨てたわ
今の私は怪人ラバーレディ
よく覚えておきなさい、道化」

ラバーレディはピエロ男を睨みつけ
そう吐き捨てる。

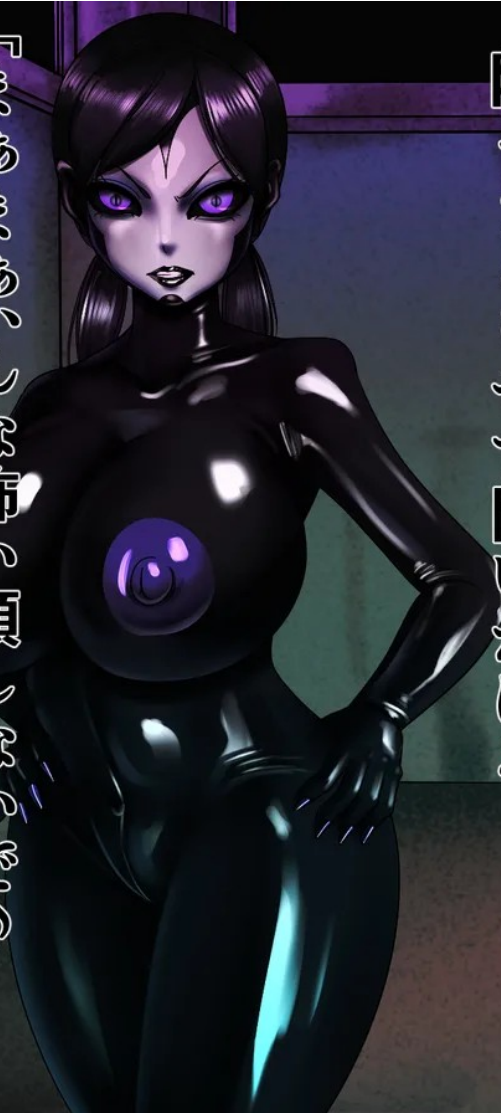


「……それで? ピエロ男サンは
何の用でココに来たの?

そんなつまらないご挨拶の
為じゃないでしょう?」

ラバーレディは、自分の楽しみを
邪魔された為か、イラついた様子を
隠そうともせず問いかける。

「まあまあ、んな怖い顔しないで♪
色々と派手にやっみたいじゃない。
それでどんな様子かなーって思ってたさ」



「どうもそのやり過ぎが原因で

元の狩場に人間が寄り付かなくなった

らしいじゃない♪」

チッ!

ラバーレディが更に陰しく顔を歪め

舌打ちをする。

「それでこゝんな寂れた場所で……」

「貴様、この場で私に殺されたいのか?」
ラバーレディは殺意を露わにする。



「ま、まあまあ落ち着いてよ♪

そんなキミにイイ話を持ってきたんだ」

「イイ話だとか?」

「そう!」

……ボクは現在チカラの殆どを
失っている状態。人間を狩るには
色々和不都合が多くてね……
だから……」

ピエロ男は飄々とした様子で
ラバーレディに内容を説明する。



「——という訳だ。
どうだい？悪い話じゃないと
思うんだけど♪」

ラバーレディは少し思案したのち、
「そうね……フフ」と
不敵な笑みを浮かべ答えた。





「委員会の仕事とはいえ
すっかり遅くなっちゃったなあ」

霧ヶ先学園の廊下を

一人歩く当学園生「道下^{みちした}笑麗奈^{えれな}」は

心細さを誤魔化す為、独り言を
呟きながら下校を急いでいた。

「なーんでみんな先帰っちゃうかな〜
おかげで私一人でこうして
暗い廊下を歩いている訳でして
……薄情者ー!! ってネ」



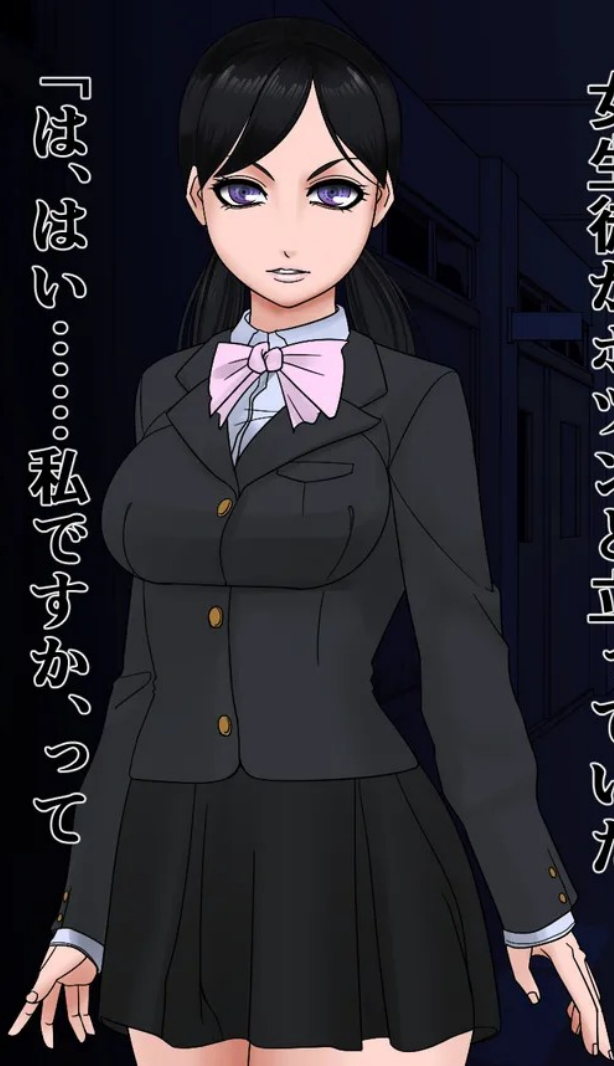
「……あの」

「はひッ!」

不意に後ろから声をかけられて
短い悲鳴を上げる笑麗奈。

振り返ると、自分の知らない

女生徒がポツンと立っていた。



「は、はい……私ですか、って
私しかいませんねアハハ!」

（あれ？あの人が付けているリボン
去年で廃止された色じゃ……？
……？）
「……あ、あの〜私に……何か？」

笑麗奈は目の前の女生徒に
恐る恐る問いかける。

「フフ……落とし物を拾ったから
貴女に渡そうと思って……コレ
貴女のもでしょ？」



そう言ってラバーレディが

ペンダントを笑麗奈に差し出す。

「え？」

「い、いえ、私のじゃないです」

（え？どういう事？あんな
気味の悪いペンダント……）



『もう一度言うわ……』

『あなたのペンダントよね?』

ラバーレディの瞳が不気味に光り

笑麗奈に暗示を掛ける。

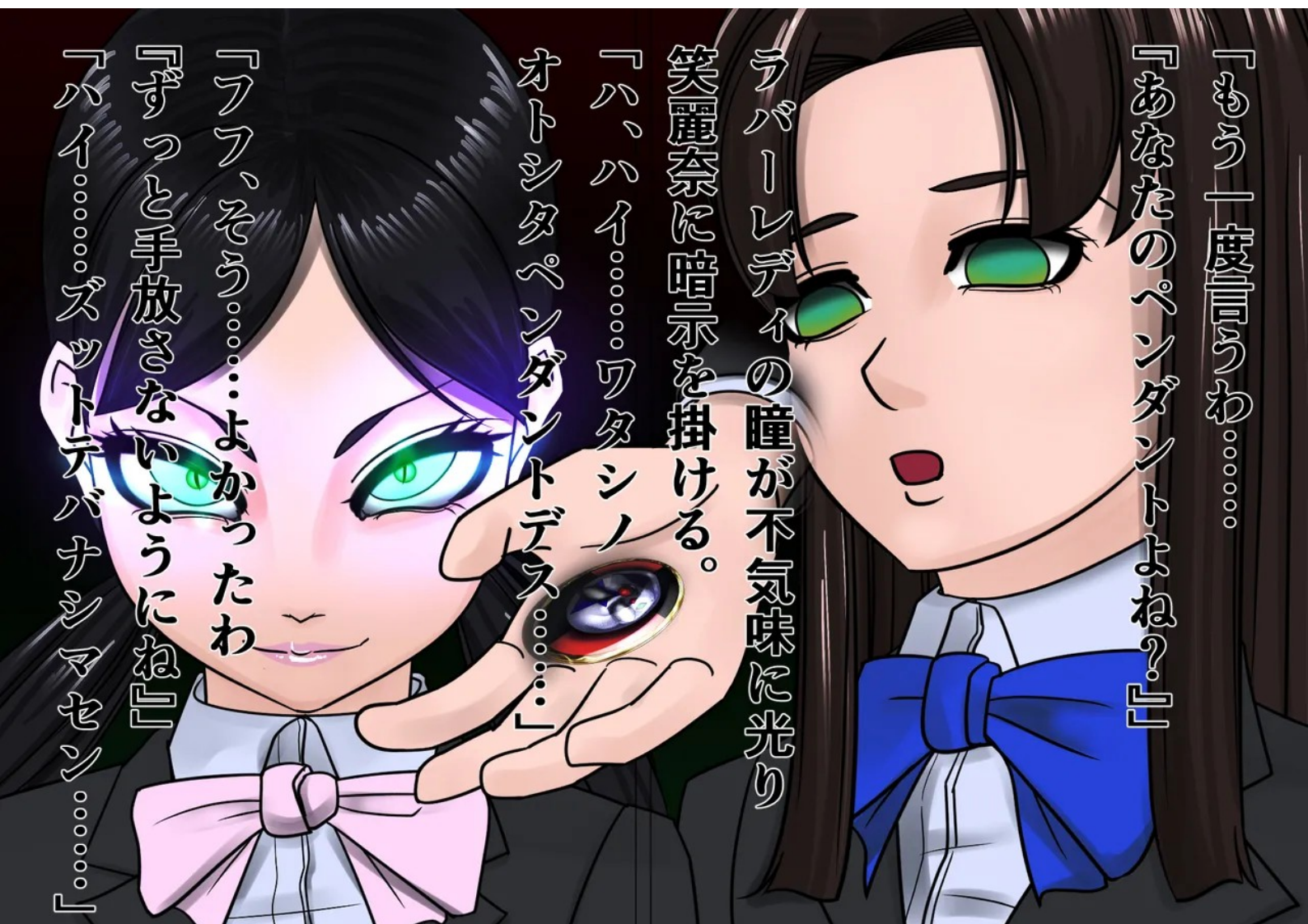
「ハ、ハイ……ワタシノ

オトシタペンダントデス……」

「フフ、そう……よかったわ

『ずっと手放さないようにね』

「バイ……ズットデバナシマセン……」



そして、笑麗奈はその状態のまま
すたすたと学園を後にした。

「後は収穫の時まで待つだけ
……ンフフッ」



「……それにしても

道化の能力で以前の自分に
擬態したけれど、今やこの姿に
嫌悪感しか抱かないわね」

そう呟きながら闇に溶け込んで
いった。

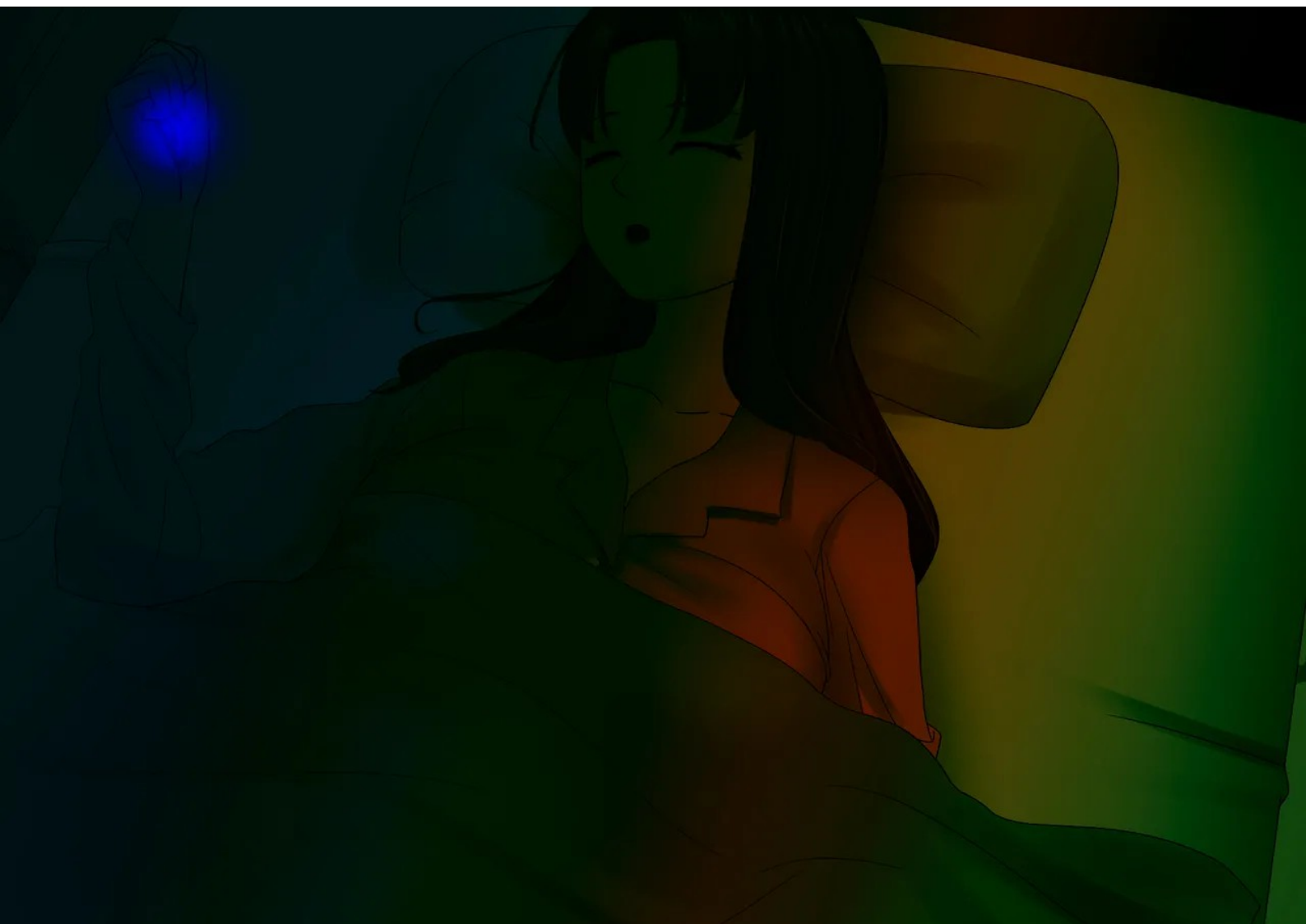


夜――

暗示に掛かったままの笑麗奈は
手にペンダントを握って
眠りについた。

そして……







「フヒヒッ、ようこそ道下 笑麗奈さん
このボク、ピエロ男の異界空間へ♪」

「え？な、何ココって、は、裸だし！

なんか生首が喋ってるし！

……ゆ、夢だよ……ね？」

「面白いお嬢さんだ♪

まあ、夢のようなモノだと
思ってくれてイイヨ」



（フヒッ、ようやく見つけた
ボクの適正体。

ココロを開き、自ら体を差し出すよう
作り変えてあげるヨ……）

「それじゃあ、まずは笑麗奈の

オマンコを犯してアゲルヨ♪」

（でも、最初は強引にいかないとネ♪）

「……へ？ い、いやいや何を……」

いつの間にか笑麗奈の傍には

全身が黒い男が立っていた。

「い、いやあああ！」



間髪入れず笑麗奈は男に捕まり、
前戯も無しにチンポを挿入され
赤い鮮血が垂れ落ちる。

「いやあああ！な、何これ！

夢、夢なのにっ！」

突然の流れで笑麗奈はパニックに
陥る。

「たっぷりと味わってくれヨ♪」



「んああ！嫌あ、こんな夢え！」

「フヒヒッ！夢なら夢で

楽しめばいいじゃないか♪」

「ゆめえ……夢なら早く覚めてえ

んはあ♡」

黒い男は、笑麗奈の弱い箇所を
的確に刺激し、執拗に攻め立てる。

その為、笑麗奈からは早くも
媚声が漏れ始めた。



「イイヨイイヨ」

快楽に正直になるんだ

気持ちいいのに我慢してちや

勿体ないヨ」

「そ、そん……なっアハアっ♡

は、激しっく、初めてだから

も、もっとゆっくりい♡」



「さあ、初めてのオマンコに
魔のエキス
ザーメンを注ぎ込んであげる♪
素直になれる効果付きダヨ」

「いやあ、ダメっ、な、中はあ!!」

「ど、どうして初めてなのにい
い、イクっ!イクウ♡」



「ンハア……はあはあ……
も、もう……だめえ……♡」

「初日でここまで素直になれるなんて
やっぱりキミには才能があるね♪」

「でも安心して

今日はここまでだから……」



「続きは明日ね♪」

「ハッ?」

「……自分の部屋……ゆ、夢かあ」

あの出来事は夢であった事に
安堵し、溜息をついた。
手のペンダントには違和感を
抱かずに。





「ま、またこの夢え！」

んひっ、ちよ、いきなり過ぎるよ♡」

「今日は笑麗奈にプレゼントがあるんだ

きつと気に入ってくれる筈さ♪」

「プ、プレゼントって、

また変な事する気でしょ」



瞬間、黒い霧のようなモノが現れ
笑麗奈の身体に纏わりつく。

「え、な、この霧みたいなの……って
んああ♡か、身体に
吸いつくようにい♡」

「フヒヒッ、笑麗奈の淫乱な部分を
曝け出すようになるモノさ♪」



「ンホオおおお♡♡」
全身タイツのようなモノに
包まれ、急激な快樂が襲い
軽く絶頂を迎える。

「どうだい？ボク特製の

ピエロタイツは？……って

その顔を見れば「目瞭然か」

「これすっごいい♡
全身をずっと弄られているような
感じでえ、オッ、オッ♡♡」

「うんうん、イイ感じに
変わってきたネ♪」

（チカラがあれば、
こんな回りくどい事を
せずに済むんだけど……
まあ、仕方がないか♪）

「ああああっ
そ、そろそろイキそっ
もっと、激しく突いて
犯してええええ♡」

「イクっ、わたしい、
イクイクイクっううう♡♡」



「……んはああ、ハアハア
も、もつとお……もつとしてえ♡」

「フヒヒッ、残念だけど
今日はおしまいサ」

「また明日ネ

ボクの実麗奈♪」



それからというもの

笑麗奈は己を解放するかの如く

ピエロ男が与える快楽に溺れ
その身を委ねるようになっ
ていった。



「きよ、今日はどんな事をするの?」
笑麗奈は興奮を抑えきれず、前のめりで
ピエロ男に問いかける。

「フヒヒッ、だいぶ自分の欲望に素直に
なってきたネ♪

今日は……」



「アッ、またこの霧だ♡」

もはや笑麗奈には不可思議な現象は
恐怖の対象ではなくなっていた。

ピエロ男のチカラを素直に
受け入れ、自身に取り込もうとしていた。



「あ、私の肌が青白く……ピエロ男と同じね♡」

笑麗奈は自分が徐々に
ヒトから外れていっている事を

理解しつつも、その異常性に興奮を覚えた。



「これで笑麗奈はまた一步

このボク（の本来の身体）に近づいたわけさ♪」

「ふうん……私が貴方に……か♡

でもどうしてこんな事を？まだ秘密なの？」

「そうだね……まだ、秘密さ♪」



「私が欲しい……………とか？」

「フヒヒッ」

「まあ、いつか……………それなら……………しよ？」

青白く変色してからなんだか酷く身体が疼くの♡」



「今日も私をイーッパイ、ぐちよぐちよに犯して♡」

笑麗奈はピエロ男の色に身も心も染められていく
過程を楽しみに、今日も身を委ねる。
引き返せない道だとうつつすらと
思いつつも、夢を楽しんだ。



朝――

「……またこの顔……青白くない……気持ち悪い」
笑麗奈は何時の頃からか、現実世界の自分の姿に
違和感を覚えるようになってしまっていた。

「……誰よ……この人間は……」



「……そうだ、確かあそこに

睡眠薬があつたよね……」

「……学園……どうでもいいか……」

「ピエロ男、待ってて……♡」



学園を休むと親に一言だけ伝えた後、
睡眠薬を飲み、すぐさま布団に潜り込む。

……この時を境に、道下笑麗奈は
忽然と姿を消した。

「ピエロ男、会いに来たよ♡」



「フヒヒッ、ついさっき別れたばかりなのにもう会いに来るとはとんだ好きモノだ♪」



「うん、笑麗奈は淫乱な女だから我慢が出来なかったの♡」

（フヒツ、チカラも戻ってきたし
そろそろ頃合いか？）

「それじゃあ、今から

最後の仕上げといこうか♪」

「最後の……仕上げ？」



「そうさ、コレを行うと

もう笑麗奈は人間には戻れない♪

その変わり永遠の快楽を約束しよう

現実世界へのお別れはいいかい？」

「……永遠の快楽……

ええ、もう現実の私は私じゃ無いから

こっちの私が本当のワタシ♡」

「そいつは結構♪」



「もう人間を捨てちゃうんだから
名前も捨てちゃう♪
キミはこれから

『ピエローナ』となるのさ」

「……ピエローナ……素敵♡

私、この時から道下笑麗奈を捨て
ピエローナとなります♡」



ピエロ男に向かって

宣言する事により、自身のココロに
その名を深く刻み込む。

「フヒヒッ、いい宣言だったよ
ピエローナ♪」

「ンヒッ、嬉しいよピエロ男♡」

ピエロ男に名前を呼ばれ
嬉しさの余り悶えるピエローナ。

「さあ、始めようか
ボクのピエローナ」



ピエロ男はそう告げると

自身をペンダント状へと変化させた。

「言われた通りタイツを脱いで

準備万端なようだネ♪」



「ええ、私はいつでもいいヨ♡ってその姿

……そういう事なのね♪」

ピエロ男の姿を見て全てを察する。

「幻滅したかい？」

「いいえ、むしろ私を選んでくれて
ありがとうって言いたいわ♡」



「フヒッ」

「それじゃあ……その体を頂くよピエローナ♪」
「え、ぎゃあああああああっ!!」

ペンダント状のピエロ男は
ピエローナの胸部に
深く食い込み浸食を始めた。

「ンギイイイイッ!!」

その際、ピエローナの肉体に
激痛が走り、悲鳴を上げた



「あああああっ痛い、いだいっピエロ男お!!」
「フヒヒッ、我慢してヨ。これは人間を捨て
ボクの器となる為に必要な事なんだ♪」

「う、うっわ?」

「そうさ、ボクの新しい体になるんだよ

……キミ自身を消去してボクが

ピエローナとして生まれ変わる為に♪」



「ンギい!!.....ワタシを消去.....?」
「フヒツ、一つの体に二つのココロは必要無いだろ？」
「そういう事さ♪」

「そ、んな.....」

「さすが適正体だ、もう馴染んできたぞ♪」



「んあああああつ、胸がああ！
痛つつ、膨らんでイクっ！」
魔のチカラを注ぎ込まれ
急激に乳房が膨張する。

「いいぞいいぞ♪益々ボク好みに
変わってくれて嬉しいよ♪」
「この調子でドンドン行くネ♪」



ピエローナの体が痙攣と同時に
激しく変化していった。
「んおおおおっ♡」

肉体が順応してきたのか
ピエローナの悲鳴が
喘ぎ声へと変わる。





「オオオオオオオッ!!」
ピエローナの肉体に禍々しい霧が
纏わりつく。

「肉体が魔に順応したみたいだね♪」
「さ、さあ、いよいよだ……チカラを
取り戻したらまずはあのゴム臭い女を
始末して、その後はボクのチカラを奪っ……」

「!?ど、どういう事だ？」

この女のココロを消去出来ない!?

手順は完璧の筈だ……この女の

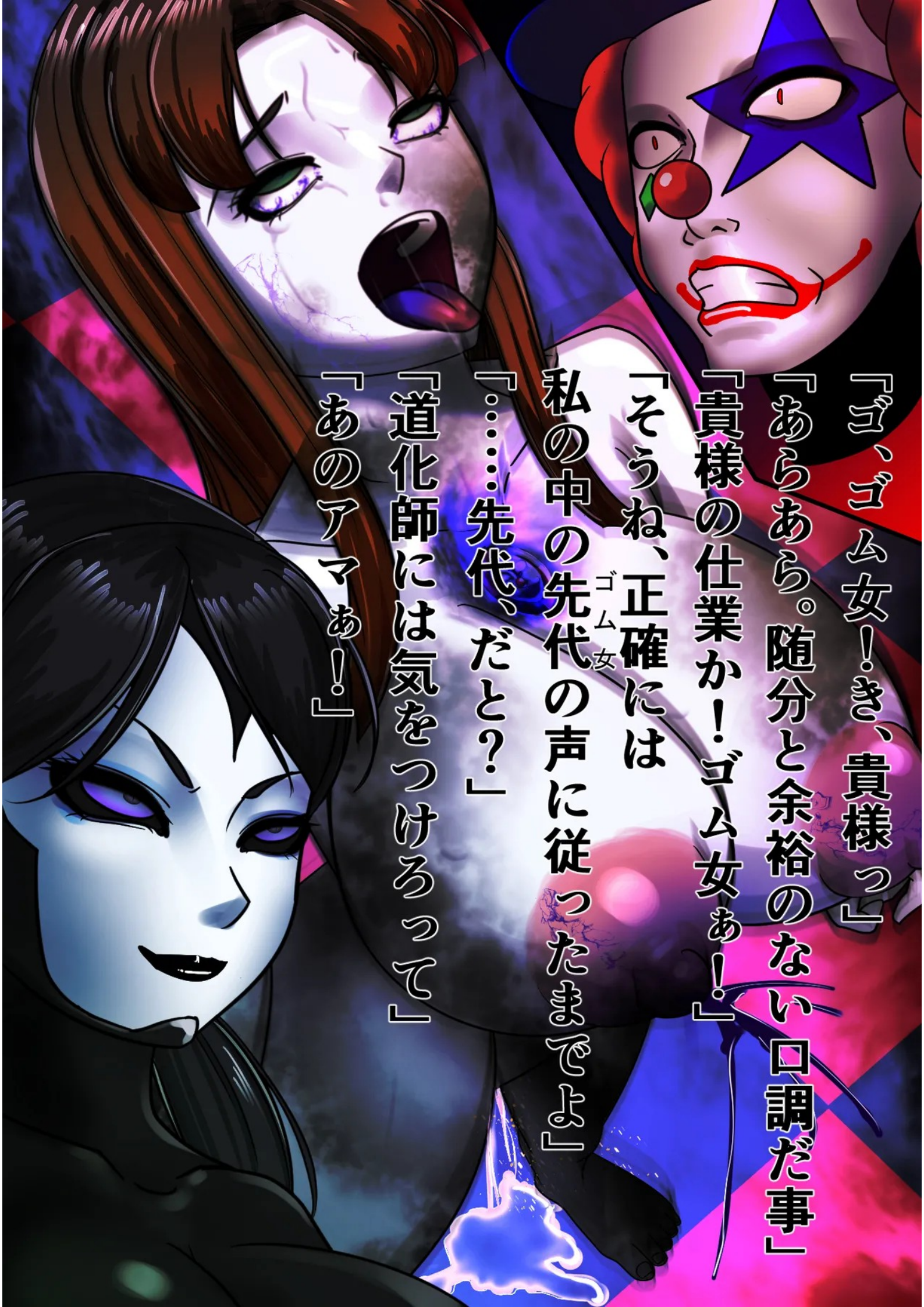
ココロを開かせて、自ら堕ちるように……」

「フッフ……ご苦労様ねピエロ男」

この異界にゴムの臭いが広がる。

「クッ!……」





「ゴ、ゴム女! き、貴様っ」

「あらあら。随分と余裕のない口調だ事」

「貴様の仕業か! ゴム女あ!」

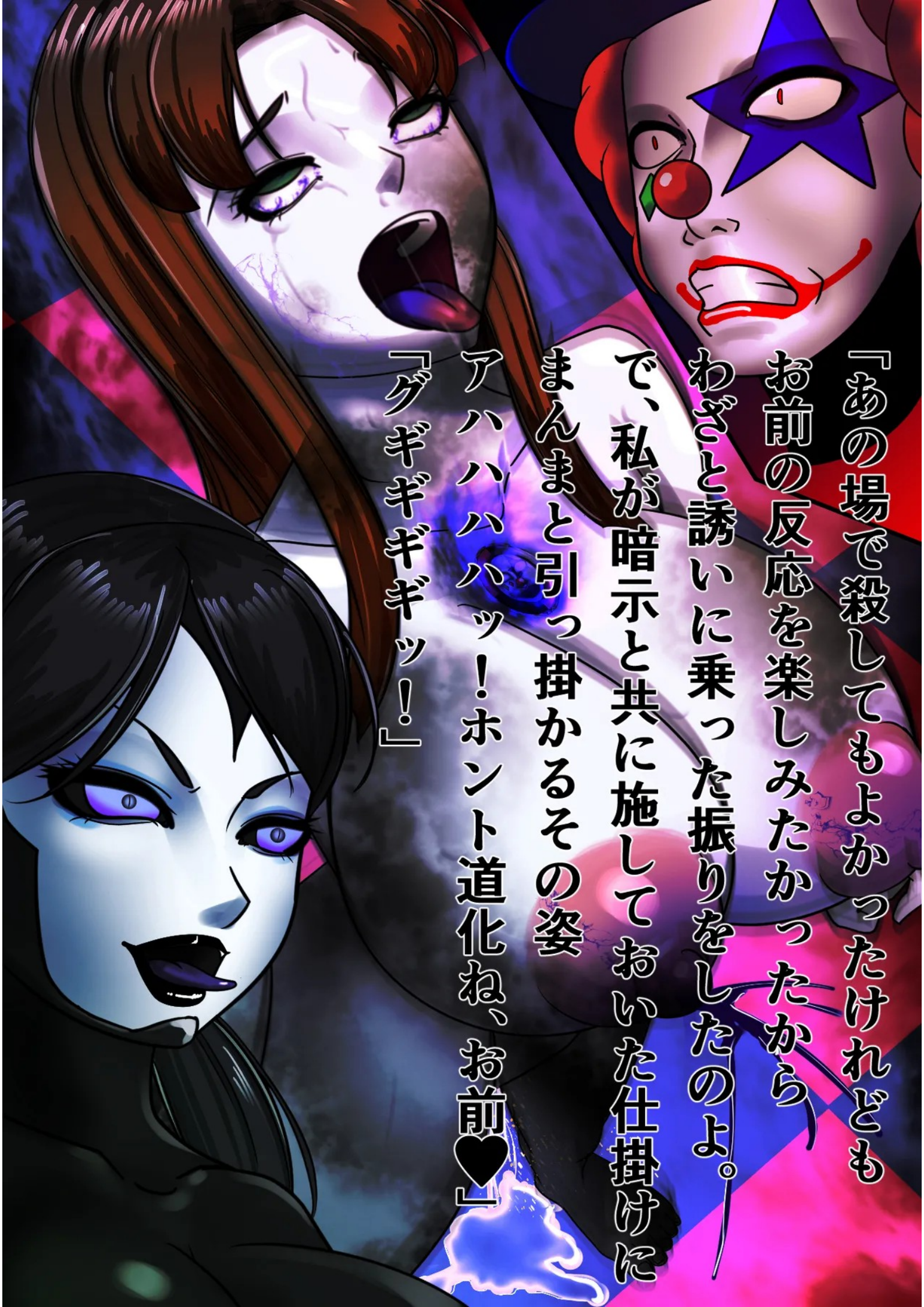
「そうね、正確には

私の中の先代ゴム女の声に従ったまでよ」

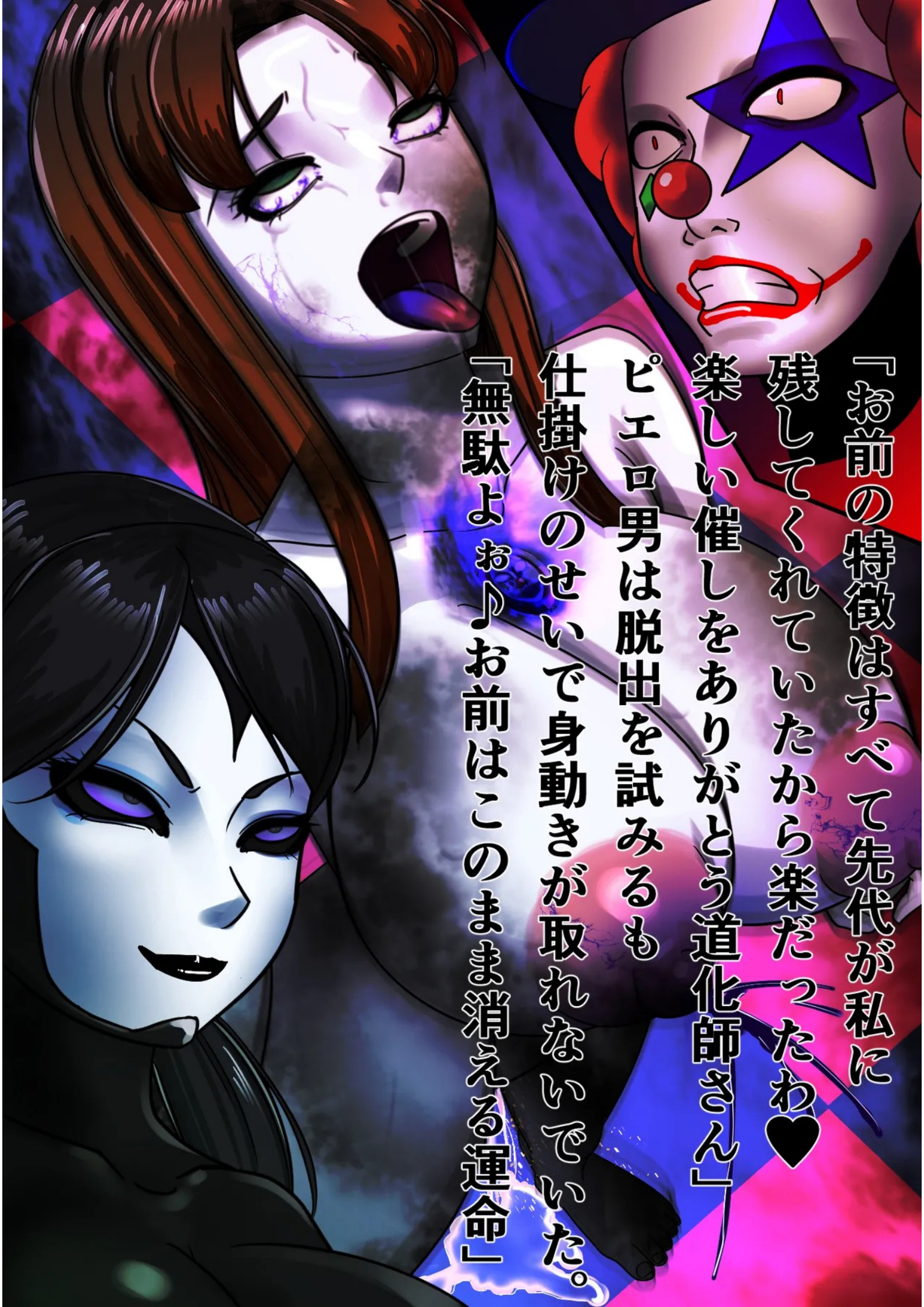
「……先代、だと?」

「道化師には気をつけろって」

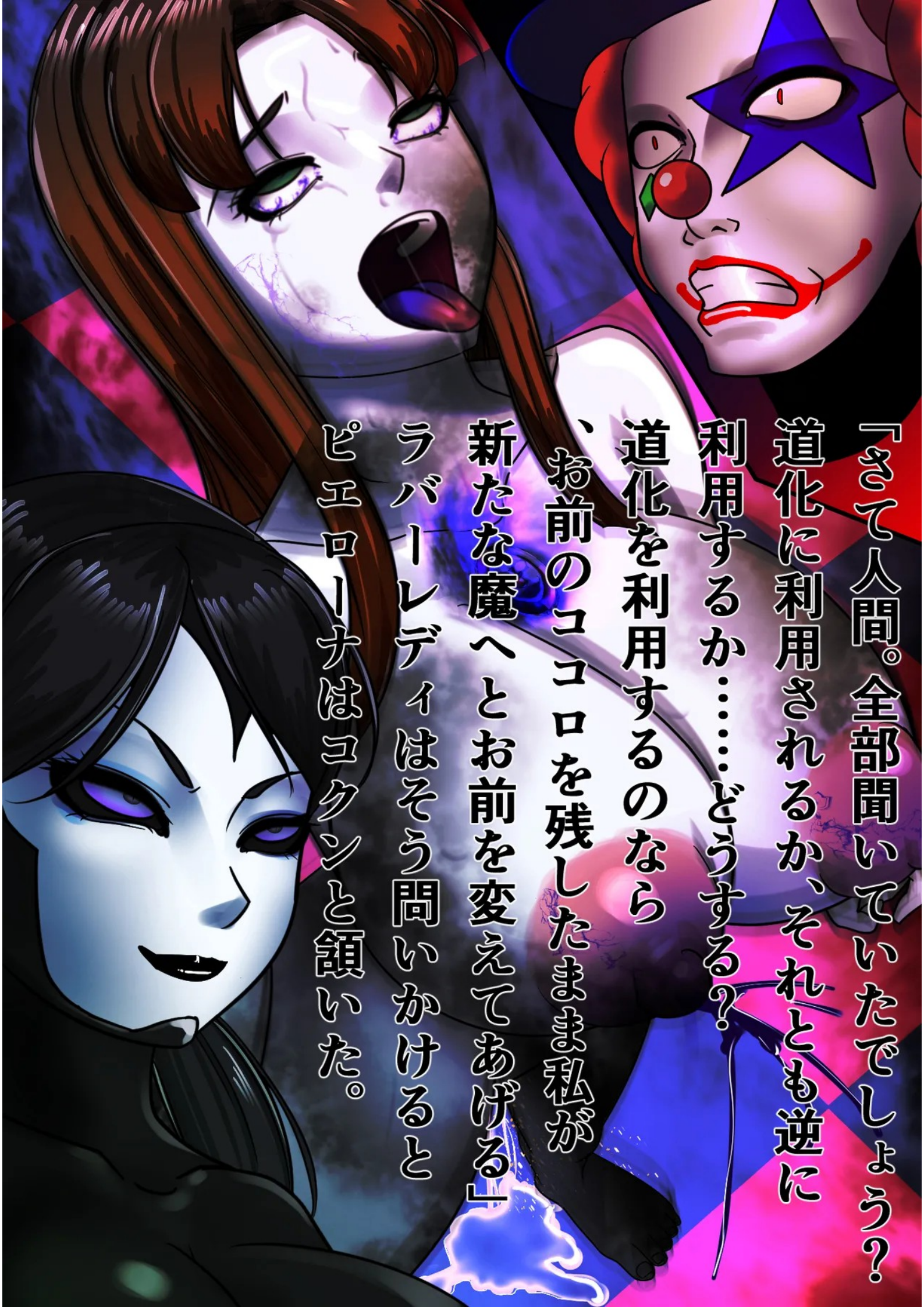
「あのアマあ!」



「あの場で殺してもよかったけれども
お前の反応を楽しみたかったから
わざと誘いに乗った振りをしたのよ。
で、私が暗示と共に施しておいた仕掛けに
まんまと引っ掛かるその姿
アハハハハッ！ホント道化ね、お前♥」
「グギギギギッ！」



「お前の特徴はすべて先代が私に残してくれていたから楽だったわ♥
楽しい催しをありがとう道化師さん」
ピエロ男は脱出を試みるも
仕掛けのせいで身動きが取れないでいた。
「無駄よお♪お前はそのまま消える運命」



「さて人間。全部聞いていたでしょう？
道化に利用されるか、それとも逆に
利用するか……どうする？」

道化を利用するのなら

、お前のココロを残したまま私が

新たな魔へとお前を変えてあげる」

ラバーレディはそう問いかけると

ピエローナはコクンと頷いた。



「そう、イイ子ね

それじゃあイクわよ！」

「や、止めろおおおお！」

「道化の断末魔が心地いいわ♡

イっちゃいそうな程に♡」

ラバーレディは自身のチカラで
ピエロ男を消滅させた。

「さあ、後は貴女よ。魔のチカラは
道化がその体に残してくれているから
そのまま委ねればいいわ。
ココロは貴女をベースにして
道化の残りカスを取り込んで……っと」





「生まれなさい、新たなる魔のモノよ！」
「ンオオオオオオオオオオオオツ!!」

『.....ンビビッ♡』

全身を覆っていた霧が晴れ姿を現す。

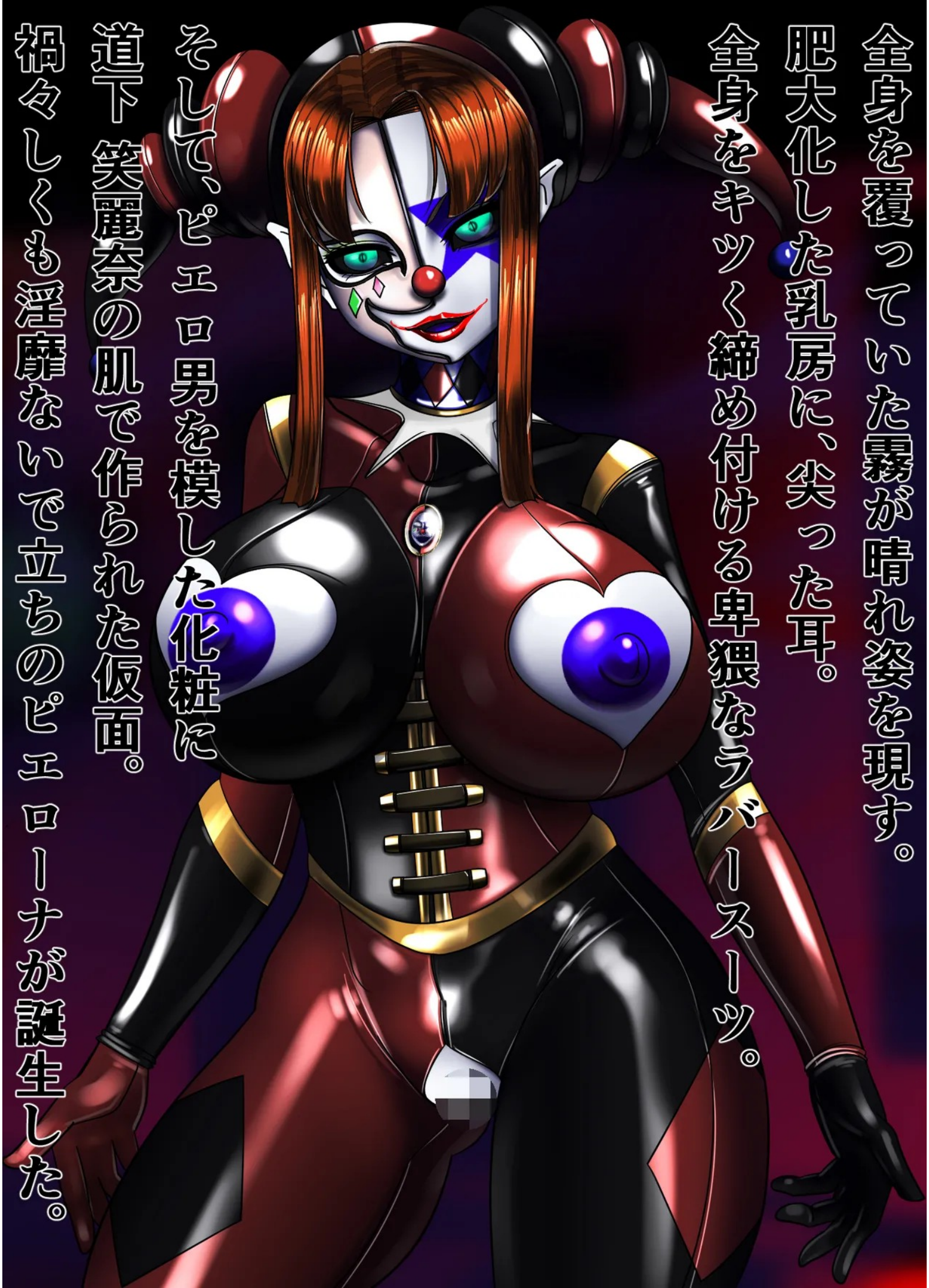
肥大化した乳房に、尖った耳。

全身をキツく締め付ける卑猥なラバースーツ。

そして、ピエロ男を模した化粧に

道下笑麗奈の肌で作られた仮面。

禍々しくも淫靡ないで立ちのピエローナが誕生した。



「どうかしら?『怪人ピエローナ』」

「……ええ、とても調子がいいわ」

「すぐにでも人間で遊びたいくらいには」

「フフフ、ココロの融合も良さそうね
ドス黒く魔に染まったみたい」



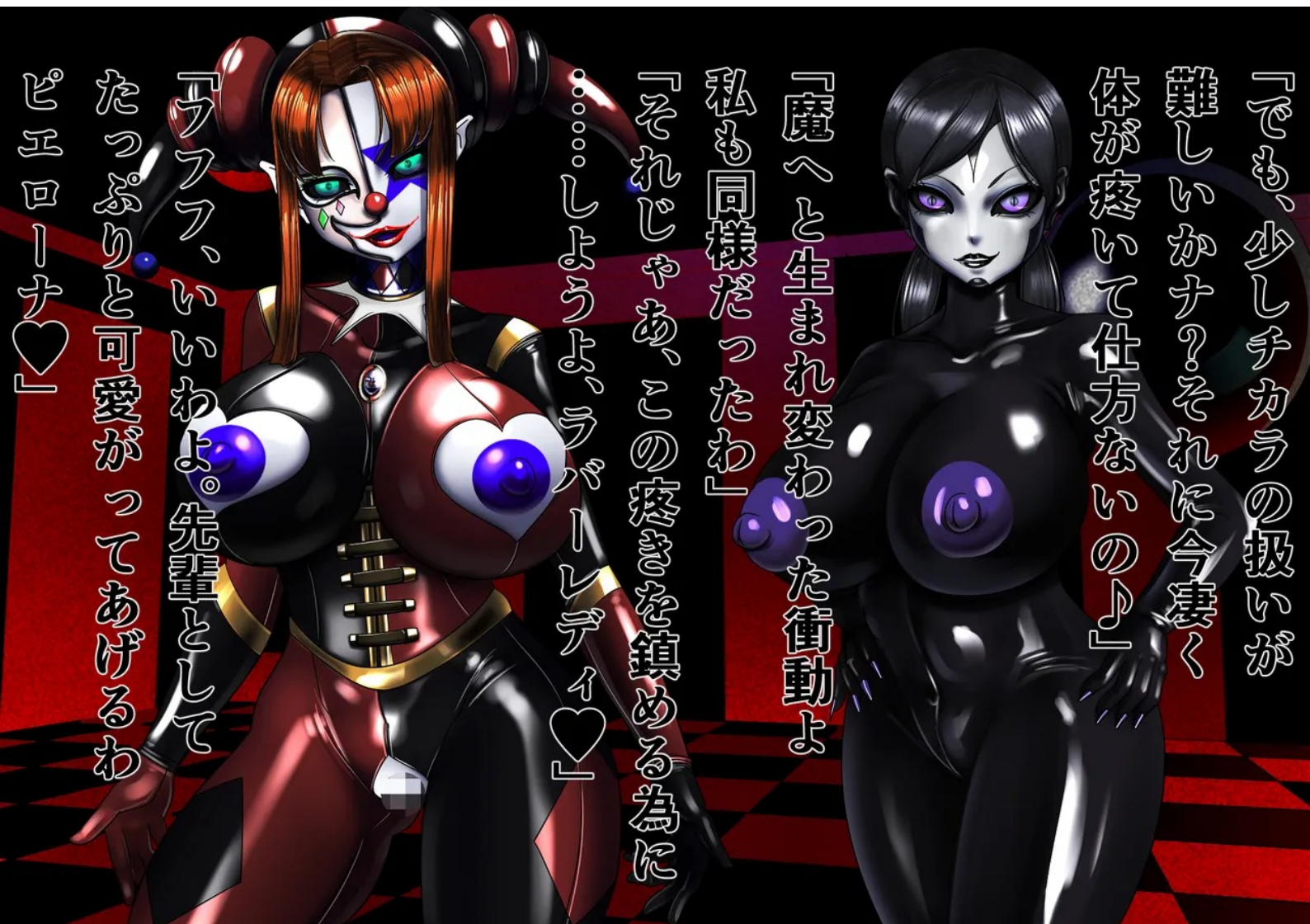
「でも、少しチカラの扱いが
難しいかな？それに今凄く
体が疼いて仕方ないの♪」

「魔へと生まれ変わった衝動よ
私も同様だったわ」

「それじゃあ、この疼きを鎮める為に

……しようよ、ラバーレディ♡」

「フフフ、いいわよ。先輩として
たっぷり可愛がってあげるわ
ピエローナ♡」



魔に見初められ、
現世から外れた悪魔の女が二人。
異界の空間に媚声が響き渡る。

END

